

薬師の**木森**の地下神殿

写真・文

津島修三

〈秋田市在住〉

ある日の鹿角市からの帰途、大館市比内町のあたりでいつもと違う道を走っていたら、農道脇の小高い山の横っ腹に大きな坑口が開いていた。何の坑口なのか気になって近くにいた人に尋ねてみたら、十和田石の採掘場だと言う。

十和田石、名前は聞いたことがあるような気がするが……。それにしても、この巨大な坑口。奥のほうは栃木県の大谷石の採掘場のような壮大な地下空間になっているのだろうか。あとからこの十和田石の会社に電話で問い合わせてみたら、「ご覧になりますか？」と嬉しいお誘い。もちろん勇んで出掛けていったのである。

思った通り、薬師森という高さ100mほどの小山の内部には、十和田石（グリーンタ）の採掘跡がご覧のような壮大な地下空間になって広がっていたのだ！ まるで何かの秘密基地か、地下神殿のような光景だ。足元から天井まで20m、足元の地点で地下50m。グリーンタフの地層はこの下何百mも続いているのだとか。

十和田石は当初門扉材として売り出されたが、輸送コストがネックで、のちに建築石材に切り替えられた。現在では全国の高級店舗の壁材や、東京芸大奏樂堂の客席壁面などにも使われている。特に、水に濡れても滑らないという性質から、浴室の床材としての需要が旺盛だとか。他にも、産学共同研究により、マイナスイオン放出、脱臭、ホルムアルデヒド吸着、遠赤外線放射、水質浄化などの機能が認められ、環境素材としても期待が持たれている。静電気除去効果もあって、会社では石の端材を使って静電気除去キーホルダーまでつくった。

会社の設立に加わり現在社長を務める中秀男さんは、埼玉出身で主に同社の東京営業所に常駐している。しかし会社はあくまでも比内町の地元企業というスタンスだ。秋田の貴重な資源を県外資本がこっそり持つていくのではなく、秋田の優れた産物を地場の会社として全国に売り出しているのだ。中社長には、会社が苦しかった時に私財を投げ打って経営の立て直しを図ったとか、かつて秋田から人を連れて行って埼玉で工事を会社を経営していたころ、「従業員はやはり奥さんのそばで暮らすべき」と、好調な会社をあっさりたたんで人を秋田に戻した……というエピソードもある。そんな人情肌の経営者のためか、従業員15名の会社の社風はどこか家庭的。いい人に掘り当てられた十和田石も、また幸せ者である。



山里の何の変哲もない小山の内部に広がる十和田石採掘跡の広大な地下空間。十和田石はチェーンソーによって豆腐の糞の目切りのように切り出され、工場で板材に加工して出荷されていく。